

ACT II 「ドラゴン退治」

テラスにある白いテーブルには不思議な香りのお茶。テーブルの向かい側には不思議少女のフェアリーが微笑んでいる。

「ユージ、ありがとう。下がっていいわよ。」

ユージと呼ばれた少年はペコッとお辞儀をすると、そのままトレイを抱えてどこかへ行ってしまった。

「さて、話しを続けるわね。ここは思議と同じディメンションに属している世界なのね。」

「そうね。でも、思議なんて人間も住んでいない惑星を知っているのに、どうしてミステリオンを知らないの？」

「まあ、いろいろとこちらにも事情というものがあって…。で、そのミステリオンという惑星のアルテという国にあたしはいる訳ね。」

「そのとおり。」

おかしいわね。地球から転移したのであれば最初に降り立つ場所は思議の筈なのに、どうしてこんなミステリオンなんて惑星に転移したのかしら？潤の転移装置でさえ二段階転移でなきゃ不可能だし、あたしの能力なんて地球上ではたかがしれている。

それにしても3A次元なんて来るの初めてなんだよね。はたしてあたしの能力はこの世界ではどれくらい解放されるのか、それが分からないというのが一番の問題かしらね。もし、能力がまったく使えないとなったらドラゴンどころの話じゃなくなるもの。

それにもう一つ気になることがある。さっき宙に浮いてみせたフェアリー。いったいあなたは何者なの？

「ね、フェアリー、あなた、さっき飛んでいたわよね。」

「あら、リュースは飛べないの？」

うーん、痛いところをつくなあ。フェリアならやってみせるところだけど…。

「もしかして、この国の人みんな飛べるとか…？」

「まさか！飛べるのはジーンだけよ。でも、あたしは普通の人間よ。」

一瞬、そうかあ…とホッとしかけて、今の答えがまったく何の解決にもたたなかったことに気づいた。

「ジーンって？」

「えーっと、分かりやすく言えば魔法使いかしら？普段は森に住んでいるのだけど、新月の夜だけはここの中庭で不思議な舞踏会を開くのよ。」

魔法使い…また不思議な存在が出てきた。ドラゴンだのジーンだの本当にそんなのが存在するのだろうか。

「で、フェアリーはジーンでもないのにどうして空を飛べるの？」

「ああ、そうよ、ドラゴン！忘れていたわ。駄目よ、早く退治しないと大変なことになるわ。」

なんなんだ、この飛躍は…。もう少しであんたのことが分かると思ったのに…。

「でもねえ…。相手はドラゴンなんでしょ。ほら、道もまだよく分からないし、あたし一人じゃ危ないと思わない？」

一応あたしはか弱い乙女なのよ…と言うのはさすがに遠慮しておいた。この子があたしのこと

をリユースと呼ぶ以上、か弱くないことはとうにばれているに違いないもの。でも、それもこれもこの世界での能力次第っていうのがいまいち不安なんだけどね。

「じゃあ、道案内に一人つけるわ。本当は軍隊でも貸せればいいのだけど、生憎とこの国にはそういうのはないのよ。」

そう言ってテーブルの上に置いてあったガラス製のベルを鳴らした。

すぐそばでその合図を待っていたかのようにベルがなると同時にさっきの少年が現れる。

「ユージ、悪いけどドラゴンのいる所までこの方を案内してあげて。」

「また…ですか。案内はするけどあとは自分でやってもらいますよ。」

「それで十分よ。では、お願いね。」

ユージは本当に面倒くさいって顔で頷いた。

「飛べる？そうでなきゃ歩いていくことになるけど。」

飛べるか試してみようか？でも…、やっぱり歩いちゃお。フェアリーを100%信用した訳じゃないし、自分でもよく分かっていない能力を中途半端に見せることもないもんね。

「歩こうよ。ついでにこの国を案内してくれると嬉しいんだけどな。」

「じゃ、そうしよ。僕も飛ばされるのは好きじゃないから。」

歩くことが決まって、ユージの表情もややほっとした表情になる。フェアリーはちょっと首を傾げて面白そうにユージを見ている。あたしもこのテラスから直接出発！…なあってことがなくなって、とりあえずはひと安心。

「ドラゴンはシースの岩の近くにいるわ。気をつけてね。」

フェアリーの言葉を片手で受け流して、ユージは黙ってスタスタ行ってしまう。

「待ってよ！」

廊下のくせしてやたらと広々としているところを抜け、誰がこんな扉を必要としたんだと理解に苦しむくらいのかい扉を開け、あたし達二人は館の外へ出た。

外へ出てみて改めて気がついたけど、なんというかこの館はやたらとでかい。建物自体が大きいのは分かるとして、窓や扉などのサイズがとにかくでかい。さっきの部屋なんかは一応普通の人間が生活できる範囲の大きさだったから、単に大きいなと思う程度だったんだけど、外側から見るこの異様なサイズは一種独特の圧迫感がある。

しかも建物の大きさの割りに庭がとっても小さいので、建物の周囲はいきなり森。ううん、森の中にこの館だけが無理やり割り込んでいると言うほうが合っているかもしれない。

「ねえねえ、すごい館なのねえ。」

「当たり前だろ。」

うーん、いまいち無愛想だけど、仕方が無いかしらね。

森にはあたしの知らない花が咲き乱れ、名前も知らない小動物達がいた。その形態や色合いは本当にいろいろで、これだけで一日見ても飽きないかもしれない。地球の常識から言えばもう不可思議としか思えないような奴がいっぱいた。カメラを持ってきていないのが本当に残念でならない。

でも、どうしてどの次元層に行っても人間だけは同じなんだろう？何か理由があるのだろうか？人間だけが何か違う法則の中で進化しているような気がしてならない。いつか機会があったらラオコーンに訊いてみよう。

「割といい所なのね。静かだし、気候はいいし。」

「そうさ、アルテはこの惑星で一番素敵な所さ。」

ようやく笑顔を見せた。やっぱり子どもは笑ってくれなきゃ。なあんて、こんな台詞が出てくるようじゃあたしもそろそろおばさんの仲間入りかな。

ん…あの声？遠くの方から唸るような声が聞こえてくる。心なしか甘酸っぱい感じの臭いが鼻の奥をくすぐる。気のせいかな周囲の温度も上がってきたような気がする。さっきまでの気持ちよい気候はどこかへいってしまい、どっちかというとな暑い…。

「ユージ。」

「しっ…、この岩の向こう側にいるんだ。」

本当だ、岩の隙間から見える。緑のウロコに覆われて紅い眼をしたドラゴン。この周辺だけが植物もなく岩ばかり、その岩の間に横たわっていた。翼を微かに動かし、時折ため息のように炎を吹いている。

「今は眠っているだけだからおとなしいけど、起きたらすごく強暴になるよ。今がチャンスだね。」

「ユージは来ないの？」

「やだよ、怖いもん。フェアリーみたいに空を飛んで逃げられないしさ。」

これは本当、この子ここまでも相当やせ我慢している。本当は怖いのに、わざと素っ気ない態度をとることでそれをごまかしているんだ。

「オーケー、ユージは帰っていいよ。あとは任せていいわ。」

「いいよ、ここで待ってる。」

うふっ、なかなか可愛いじゃない。

「じゃ、ちょっと待っててね。」

あたしは少し集中するとスーッと岩の上にジャンプ。ユージにウインクすると、一気にドラゴンの上にテレポーションした。

ドラゴンはたしかに眠っていた。だけど、それはあたしが能力を使うまでの話し。おそらくはあたしが能力を使ってしまったがためにそれに反応したみたい。ドラゴンはいきなり立ち上がった。羽を広げ、今にも飛び立とうという動作を何度か繰り返す。あたしはバランスを崩して慌てて角にしがみついた。ドラゴンは激しく頭を振ってあたしを振り落とそうとする。あたしは落ちないようにしがみついているだけで精一杯。

今度は飛び上がった…、でもすぐ引き戻されるように地面に激突。その拍子にあたしは宙に投げ出された。あたしは宙返り一つで空中にかりうじて留まる。そして、何が起きたのか理由が分かった。ドラゴンの足には鎖が付いている。あのせいで飛べないんだ。

鎖でつながれているドラゴンを退治してくれというのは悪い冗談だわ。フェアリーは初めからあたしを試すつもりでこんなことを頼んだのかしら？

「ドラちゃん、ごめん、暴れないで…。」

ちょっとドラゴンが可哀想になって思わずかけた言葉にドラの動きが止まった。あはっ、まさかドラがあたしの言葉を分かってくれるとは思わなかったわ。

「あたしの言葉が分かるの？」

頭の中に響くようなテレパシーで返事が返ってくる。

「驚いた。君はジーンではないな。」

「あたしの名はリュース。この世界の者じゃないわ。フェアリーにあなたの退治を頼まれたのよ。でも、なんか訳ありみたいね。」

「暴れているのは僕の意味ではないんだ。僕の名はリュシー、フェアリーの家庭教師だった。」

「家庭教師？」

「もちろん、僕の本当の姿はこんな姿じゃない。悪いハグに騙されて姿を変えられたんだ。僕の意味はこうしてドラゴンが気絶でもしていない限り表に出せないんだ。」

「ふーん…、元に戻る方法はあるの？」

「僕には分からない。いけない！ドラゴンが目を覚ます。早く逃げて…！」

その途端ドラゴンは立ち上がり、リュシーの意識も消えてしまった。ドラゴンは届かない前足を必死にあたしの方に向けて吼える。かなり怒っているみたいね。

このドラちゃん、どうしても退治しなきゃ駄目かな？

あたしがフツと息を抜いた瞬間、ドラゴンが口から炎を吹いた。油断してシールドを張っていなかったものだからまともに火に包まれた。

「熱い！」

心の中で叫んだと同時にあたしの身体は水の中にあった。く…苦しい、息が出来ない。酸素…酸素が欲しい…。必死に手足を動かす。水面に…もう少し…頑張れ…。

水面に出た！息をするのと、目も前にドラゴンの顔があるのに気づくのがほぼ同時。一呼吸を置いて、世界の果てまで届くかと思われるほどの大きなあたしの悲鳴。

ここで一応は説明しておく、あたしは何もドラゴンが恐くて悲鳴をあげたんじゃない。ドラゴンが気持ち悪くて悲鳴をあげたんじゃない。単に条件反射なのよ。昔、フェリアという惑星で、ウィリーという犬がいて、この犬がまたなぜか嬉しくなると身体が大きくなるという特異体質の持ち主で、あたしはウィリーによく驚かされたのよ。その時の習慣が身体から離れないのよね、目の前にでかい物がヌーッと現れると、どうしても莫迦みたいな大声を出しちゃうのよ。

とにかくあたしのでかい大声で本日二度目のダウンのドラゴンがあたしの前で長々とのびている。実際、こういうダウンのされ方って実に不本意だわ。

「本当、驚いたよ。君は面白い人だ。」

「ちょっと面白がらないでよ。誰のせいで苦労していると思ってんのよ。」

「悪かった。でも、おかげで仲間と連絡することができたよ。もうすぐ僕の仲間達が来る。そうしたらきっと何か手を考えてくれる。」

「リュシーの仲間って…？」

うわっ、ドラゴンがいきなり目覚めた。今度の怒り方は並みの怒り方じゃなさそう。とにかく目茶苦茶に暴れ始めた。自分の身体が傷ついたって関係ないって勢いで鎖を引っばっている。

「ちょっと、リュシー？」

あ、駄目か…。反応ないや。これは困ったわね。どうしたらいいのかしら？

「はい、お姉さん、お困りのようね。」

えっ…？また、違う人からのテレパシー。いったい、この惑星にはどれくらいの能力保持者がいるのかしらね。

「そんなに驚かないで。話しはさっきリュシーから聞いたよ。元に戻すのを手伝うからさ。」

「どうすりゃいいの？」

「俺がドラゴンの動きを止めるから、もう一度ドラゴンを眠らせてくれるかな。」

「分かったわ。」

そうと決まったらいつまでも水に浸かっている場合じゃないわね。再びドラゴンの頭上まで浮上して身構えた。

どうやらリュシーの仲間は姿を見せずに戦っているようで、ドラゴンは狂ったようにも見えるけど、さっきまでのように目茶苦茶に暴れるという感じでもなくなった。さあ、あたしはどうしたらいいかしらね。

不意にドラゴンの動きが止まった。まるで金縛りにでもあったかのように固まっている。今しかない！とあたしは大きく深呼吸をして、ドラゴンの目と目の間のいわゆる眉間の呼ばれる場所にエネルギーアローを打ち込んだ。

ドラゴンはそのままの姿勢でゆっくりと後ろにひっくり返る。その瞬間にもうもうと土煙が立ちこめて周囲がまったく見えなくなってしまった。

「やったね。あとはリュシーの能力でなんとかなる。」

へっ…？ゆっくりと土煙が収まった時には、倒れた筈のドラゴンの姿はなく、元の岩しかない殺風景な中に黒いマントをまとった青年が立っているのが見えてきた。

「じゃあ、俺は帰るよ。リュシーによろしくね。」

「ちょっと、姿くらい見せたらどうなの？」

「また機会があればね。」

あ…消えた。近くにあった気配が消えてしまう。まあ、いいか…。あたしはリュシーの横へ降りた。

「えーっと、初めましてかな。あたしはリュース。よろしく。」

「僕はリュシー・カイ。よろしく。それから、助けてくれてありがとう。」

「べつに助けるつもりはなかったんだけどね。こういうのって、単にあたしの宿命みたいなもんだから。」

「なんだかよく分からないけど、とにかくありがとう。どうやらキュルは帰ったらしいな。あいつにもお礼を言わなきゃね。」

リュシーは森の奥の方を見た。

「ねえ、彼はいったい何者？ううん、それよりもあなた方はどうしてそんな能力があるの？」

リュシーは目を大きくして驚いた顔を作った。そして、すぐにまた笑顔になる。

「フェアリーは何も言ってない？」

「うん…。だいたい、あたしがこの世界に来てからまだそんなに時間が経ってないわ。」

「よし、じゃあ、館に戻ってからきちんと説明するよ。」

リュシーはそう言うが早いかフワッと飛び上がる。あたしも慌てて飛び上がってからユージのことを思い出す。

「そうそう、ユージがこの岩の向こうで待ってんだ。連れてくるね。」

スーッとそのまま空中で大岩を越えて、ポツンと立っているユージを見つけた。

「ユージ、帰るよお。」

悪いとは思ったけど、帰りは一刻も早く帰りたい気持ちが勝ってユージをテレキネシスで持ち上げてしまった。

「うわあ、やめ、やめ。」

急に身体が浮き上がってあせったのか、手足をバタバタさせて体の向きがなかなか安定しない。

「ユージ、お願いだから身体力を抜いて、水の中を泳ぐようにするのよ。」

結局はあたしとリュシーがユージの両脇を抱えてなんとかひと安心というところ。

「バカヤロー！覚えてろよー！俺はどうせ泳ぎも下手だよ。」

フェアリーが待つ館に着くまでユージはずーっと喚きっぱなしだった。ごめんねえ。

歩いていった行きと違って、森の上を飛んで行く帰りはあっという間だった。

「リュース！ユージ！」

フェアリーはまだ2階のテラスにいた。あたし達の姿を見つけて手を振っている。

「どうやら、あたし、上手い具合に乗せられたようね。」

「何が…ですか？」

「あなたのことよ。フェアリーはきっと最初からドラゴンを倒せばあなたが元に戻ることを知っていたのよ。それを知ってて言わなかったんだわ。」

リュシーは急に笑い出すと、フェアリーに向かって大きく手を振った。

ACT II 「ドラゴン退治」

S61. 17. NOV <<H20. 17. AUG>>